世田谷村日記

石山修武

十月二〇日

北海道十勝。昨日突然二川幸夫明日十勝撮影の連絡入り同行する。早朝五時起床。家内に羽田まで送ってもらう。早朝の環八は車も少なく気持ちよく走り、一時間で羽田に着いてしまう。朝一番のＪＡＳで帯広へ。ＧＡ杉田君も同行。飛行機は満席。アメリカのテロ事件の余波で日本人の海外旅行者が激減し、沖縄も危ないようだという事で、旅行者の流れが北海道に集中しているらしい。機内でスープをリクエストしたら狂牛病事件の影響で出すのをひかえているとの事。スープの素に牛の何かが含まれているからだ。物騒なような、滑稽なような、しかし機内の人々の顔付や、立居振舞いは勿論平和ボケの面々のそれでもあり何とも不思議なフライトであった。北海点字図書館後藤氏帯広空港に出迎えてくれる。天気は良いが肝心の山が見えない。二川幸夫こりゃ駄目だ帰ろうなぞと言い放つ。ヘレン・ケラー記念塔十時過着。写真家は光の様子が満足でないようで、機材の選択を過ったと一人言を言う。現場には共同通信の宮崎晃記者が待っていてくれて、この人とは佐賀で会っていらいの附合いである。

二川幸夫塔のまわりを一人言を言いながら巡る。それが気になって仕方ないのだが、撮影は写真家が王様だから、何となく居るのか居ないのかわからぬような位置にいるように心がける。建築を呑み込むのに手間取っているか、気に入らないかどちらなのか解らない。写真家の痛烈なドライさを私は知っているから、コリャ駄目だ帰ると言い出すかと冷汗をかくが、もう仕方ない。勝負なのである。こちらはこちらでこれは今のところ俺のベストだと言う確信は一向にゆらがないのだから、これを駄目と言われれば、ここで真昼ならぬ朝ぼらけの決闘かと覚悟を決める。しかしながら、どうやら釈然としない何かがあるようだ。写真家何となく撮り始めるがどうも気合が入らない。西にまわり、撮り続け、内に入る。中は真暗だから予想通り撮りようがない。だって盲目の人のための建築なんだから。こちらも居たたまれなくなって宮崎記者のインタビューを写真家のじゃましないように受け始める。写真家は一人にしておいた方が良さそうだと思ったからだ。昼を過ぎて、光が西へ廻り、写真家はようやく動きに精彩が生まれ始める。朝撮ったアングルを撮り直し、再び塔を巡り始める。午後三時何とか終了。しかし写真家はまだ納得していない。空腹の極み。写真家もう少し残って撮るから、お前勝手にメシ食ってこいなどと言い放つ。宮崎記者杉田君も明らかに腹ペコペコでどうしようもないが、どうする事もできない。二川幸夫「中途半端な撮影だった」と言いながら荷物をまとめ始める。建築が中途半端だったのか、何が中途半端であったのか、こちらも釈然としない。勝負は不明だ。建築家と写真家の関係は厳しい。

帯広市内の象設計集団設計のビアホールでビールと食事、後藤氏インタビュー。後藤さんは二川幸夫の質問に明晰に答える。盲目の人のための建築について俺がしゃべるよりも良かった。盲目の人の建築が眼の見える人のためにもなるという事を彼は話した。二川幸夫少しばかり釈然とする。俺は何となくビールを飲み続けた。北の屋台を見学し、ラーメンを食べて空港へ。最終便で東京に戻る。変な一日だった。何かがすれちがっていた、発表は来年になるのだろうが、どうなることやら。何かがすれちがっていた

事だけは確かだ。しかし写真家の眼には筋金入りの確かさがある事は信じているので、その原因を考えてみる価値がある。こういう勝負が続くのは俺にとっても張り合いがあるが、油断大敵である。でもね、山が視えなかったのが、すれちがいの原因の一つだったと俺は信じる。幌尻岳、十勝連山がバックになければ成立しない建築なのだ。小さな塔は山にひきたてられ、又、同時に山をひきたてるものだから。ともあれ、今日の勝負を振り返ると、手掛けている建築はひとつも、手を抜けない。次の建築、次の次の建築も力を尽そう。イヤー疲れた。休みたいけど、休めないよ全く。

宮崎記者にはめいわくかけた。無事に札幌まで帰れただろうか。

十月二一日

朝屋上菜園に上る。草むしりして、土を掘り返し中華春菊と正月菜の種をまく。こんな小さな菜園でも草の匂いがほのかに漂よって、鳥や虫が集まっている。ＧＡＨＯＵＳＥ原稿「幻庵」書く。

午後新宿へチョッとした買物。南口西口周辺を歩く。全く十年前とは人の流れがちがっていた。若者の風俗もＴＶのＣＭ通りになってしまっているようだ。カンボジアへ帰った小笠原さんの知り合いが二、三人来ることになっているので夕方世田谷へ戻る。日経朝刊に松岡記者が大きく世田谷村を紹介している。建築ジャーナリズムの小さな村のセコさから脱出しようと決めてしまった私にはこういう記事は嬉しい。